

「長万部発ホタテ貝ブランド」湾宝」に込めた想い。」

古くからホタテはアイヌ民族の伝統的生活に利用されてきた。現在、噴火湾でもトップクラスの水揚げ量を誇る長万部のホタテ養殖は町の自慢だ。突然の大量死と苦難の復活を経て新ブランド「湾宝」として再生した現在進行形のストーリーを紹介したい。

アイヌ文化とホタテ

かつてシャクシャインの戦いの舞台ともなり、また、アイヌ語由来の地名が数多く残されている長万部町。長万部という地名はアイヌ語のオ・シヤマンベが由来で、「カレイのいるところ」という意味を持つと伝承されてきたし、明治期ころまで、長万部のアイヌ民族はオットセイ漁や捕鯨の伝統技術を継承していた。昭和6（1931）年から長万部村長藤原覚因を会長として「エカシケル（祖先の尊き家）保存会」が設立され、地域のアイヌ文化伝承者が主体となり昭和12年ころまで旭浜地区にアイヌ文化展示施設「エカシケル」を置いていたという記録も残る。長万部町は歴史的にアイヌ文化、とりわけ海洋文化と深く関わってきたと言えるだろう。

現在の長万部の主要産業である水産業の中心となるのは、ホタテ貝養殖だ。

漁協組合員のほとんどがホタテ貝養殖業に従事し、総漁獲高の約9割を占める水揚げ実績となっている。長万部町では、代々アイヌの人たちにホタテ漁師が多く、現在でも町のホタテ漁師の約6割に及ぶほどだ。

アイヌの人たちは、かつて、夜になると「ラッチャコ」と呼ばれる、三つ股の

木にホタテ貝の貝殻を乗せ、魚油に灯を灯すランプを生活用具として使用していた。生活の糧としても生活用具としても、ホタテと密接に関わってきた歴史がある。

ホタテの危機

近年、そんな長万部のホタテ貝養殖業が危機に見舞われた。平成28（2016）年ころから、ホタテ貝が大量に死んでしまう事態となったのである。令和元（2019）年には、ついに水揚げ量が通常の1割にまで激減してしまった。ホタテ貝の大量死は、噴火湾全般で共通していた状況でもあった。原因を探り、再びホタテ貝養殖を安定化させることは、長万部町のホタテ漁師にとって必要不可欠である。そこで、町は令和元年度、ホタテ貝養



殖の稚貝へい死の調査研究事業により水揚げ量の安定化を目指すとともに、アイヌ文化を取り入れたホタテ貝のブランド化を目指し販売を促進する「長万部町アイヌ政策推進事業」（アイヌ政策推進交付金事業）に着手した。

実現した水揚げ量の復活

漁業者を中心に、長万部町アイヌ政策推進事業に関わる人々による復活を目指すプロジェクトが始まった。

長万部のホタテ貝養殖は、海面にロープを張る垂下式。ホタテ貝の一部に穴を開け返しが付いたピンを通し、長いロー



01.02. まるごとうまいもん祭り

03. パービーさんアンバサダー任命

04. オータムフェスト2022

ブランド化へ向けた迅速な動き

ブに一つ一つぶら下げカーテンのようなスタイルで海中に垂らす「耳吊り」だ。この方法なら、自然の海の海面近くで豊富なプランクトンをたっぷり吸収し、太陽の光も十分に浴びて育つため、厚くて甘く、アミノ酸・タウリン・グリコーゲンたっぷりの貝柱に育つ。垂下したまま育つので砂噛みもないから砂抜きが必要もない。

試行錯誤の末、噴火湾の中でも真っ先に水揚げ量の復活を達成したのが、長万部だった。

令和3（2021）年度の水揚げ量は約1万6000ト、生産額約47億9000万円と拡大した。

ホタテ稚貝の大量死の正確な原因解明には至らなかったが、復活の一番の要因は「人間優先の作業からホタテ貝の気持ちになって作業を行ったことが大きいのではないかと考えられている。

こうして復活を遂げた長万部のホタテ

貝をブランド化するために令和4（2022）年に設立されたのが、「長万部ホタテ貝アイヌブランド化推進協議会」。同年3月、長万部産養殖ホタテ貝のブランド名を決める町民投票（6候補）を行ったところ、全体の46・1%の得票で選ばれたのが「湾宝」（わんぼう）だ。由来は、噴火湾の宝。そこには、長万部町民の思いが乗せられている。

同年7月28日に長万部漁港内で、当町にゆかりのあるタレントのパービーさん（お笑いコンビ「フォーリンラブ」）を招き、湾宝アンバサダーとして任命した。翌29日には、札幌市内で湾宝ブランド化プレスリリースイベントを開催し、メディア関係者へのPR活動会見を行い、湾宝の美味しさの秘密やブランドストーリーを披露した。登壇した木幡町長は



04



02

「長万部の「湾宝」を世界の「湾宝」にしたい」と宣言。また、8月8日を「湾宝の日」とすることを発表した。

以降、9月に「さっぽろオータムフェスト2022」「GOOD LIFE FESTA 2022」（東京ビッグサイト）、10月に三井アウトレットパーク札幌北広島での「味覚まつり」に出店。また、各種の情報誌等にも紹介された。

11月には、北海道内市町村のPRソングで知られ、湾宝大使でもあるハンバガーボーイズが手がける楽曲「湾宝ー長万部ー」がリリースされ、配信がスタートした。

令和5年2月、サッポロファクトリーを会場に「長万部まるごとうまいもん祭り」を開催。2・5トものホタテが約2時間で完売する大盛況となった。

湾宝は、長万部町民の夢を乗せて、順調にブランド化に向けて歩み始めた。

13市町が協力、シャクシャインを顕彰する慰霊旗リレー。

シャクシャインの戦いから350年後の令和元年、長万部町は多くのゆかりの市町と連携してシャクシャインロード事業を企画した。シャクシャインの戦いを振り返るとともに、事業のメインである慰霊旗のリレーの様子をたどる。

シャクシャインの戦いとは？

令和元(2019)年は、「シャクシャインの戦い」(1669年)によって、アイヌ社会の有力な指導者だったシャクシャインが没して350周年。

シャクシャインの戦いとは、どのようなものだったのか。簡単に振り返っておこう。

寛文9(1669)年6月、和人の不平等な交易に怒りをつのらせたシャクシャインがアイヌモシリ(※)全域に抗戦を呼びかけると、呼応したアイヌが各地で蜂起した。また、抵抗軍が編成され、松前藩への抗議のため軍事蜂起した。これが、幕府をも揺るがすこととなったシャクシャインの戦いの端緒となった。

7月末、クンヌイ(国縫)に達したシャクシャイン軍は、国縫川を挟んで松前藩軍(以下、藩軍)と対峙した。シャク

クシャイン軍の武器は毒矢、対する藩軍は鉄砲。荒天やアイヌの奇襲作戦により戦いは拮抗するが、武力に劣るシャクシャイン軍は後退を余儀なくされた。オシヤマンベからじりじりと後退し、最終的には本拠地シベチャリ(現新ひだか町)まで退いた。シャクシャインはピボク(現新冠町)で松前藩との和睦の酒宴に応じるが、藩の謀略により毒殺されてしまい、戦いは収束に向かった。

長万部町は、平成28(2016)年10月、国縫川沿いにシャクシャイン古戦場跡碑を建立した。そこには「この戦いは、先住民族アイヌと中央政権との主従関係を意味しない。それは19世紀初頭から2度の幕府直

轄を経て、明治期からの近代法体系の中で漸次形作られたものである。さらに戦いの勝ち負けは、生き方の良し悪しを意味してはいない。この地に眠る両軍犠牲者の御霊を鎮め、明日を生きる教えの礎として、「ここに碑文を刻す」と刻まれている。

※アイヌモシリ：アイヌ語で人間の大地。もしくはアイヌの大地、国。北海道を指して使われることが多い。



01



03

ある。町は北海道アイヌ協会と共催し、各自自治体・アイヌ協会などと連携して事業を行うこととなった。

まず、アイヌ刺しゅう団体の白老町みんなの心つなぐ「巨大パッチワーク」の会(以下、心つなぐ会)・長万部町チセの会と連携して巨大パッチワーク慰霊旗を制作。パッチワークピースは公募により3カ国8都道府県27市町の方々から

提供されたほか、町内小学生を含む町民が制作し、全部で約1000枚に及んだ。これらを用いて4枚、合計27mに及ぶ慰霊旗が完成した。また、心つなぐ会、苫小牧アイヌ協会からも慰霊旗の寄贈を受けた。

令和元年9月7日、シャクシャイン古戦場跡前。長万部アイヌ協会が主催する安全祈願祭には約40人が参加した。



04

その後、いよいよ慰霊旗リレーがスタート。国縫からあつまんべまでの約10km、町内外からの参加者が慰霊旗を運びながら歩いた。そこから有志が引き継ぎ、さらに静狩漁港まで慰霊旗を運んだ。静狩漁港から豊浦漁港までは、史実を踏まえた洋上リレーを実施。クルーズ船によって静狩小学校生徒7名と慰霊旗を運び、豊浦町礼文華地区住人らと引継式を行った。

以降、豊浦町、洞爺湖町、伊達市、室蘭市、登別市、白老町、苫小牧市、厚真町、むかわ町、日高町、新冠町へと慰霊旗を繋ぎ、9月23日、ゴールである新ひだか町真歌公園にたどり着いた。合計240km、約320人が徒歩や舟で繋いだ慰霊の道程であった。

ゴール後に行われたシャクシャイン法要祭では、長万部町、新ひだか町の両町民が喜びを分かち合った。事業を記念し



02

シャクシャインの戦いをたどる慰霊のリレー

令和元(2019)年、長万部町はシャクシャイン没後350年記念事業を計画した。

町は国縫にあるシャクシャイン古戦場跡碑前からシャクシャインの本拠地のあった新ひだか町までの沿岸部自治体に、慰霊の意を表す巨大パッチワーク旗の制作や旗リレー、歴史講演など、さまざまな催しの事業連携を呼びかけた。これが、シャクシャインロード事業で

慰霊旗1枚を新ひだか町シャクシャイン記念館に寄贈した。

また、長万部町では慰霊旗のリレーに先立つ同年8月25日、歴史講演会「シャクシャインの戦いの中のクンヌイ決戦」(講師：市毛幹幸氏)を開催した。クンヌイの位置付けを検討するとともに、アイヌ社会の戦いのあり方、クンヌイ決戦の歴史的意義を考える内容であった。



05



06

- 01. 国縫～長万部間の徒歩リレー
- 02. 長万部小学校でアイヌ文様作りのワークショップ
- 03. 安全祈願祭

- 04. 静狩～豊浦間の洋上リレー(静狩小学校生徒が参加)
- 05. 大浜～長万部間は子どもたちもリレーに参加
- 06. 歴史講演会(市毛幹幸氏)